ひと・まち・ゆめをつなぐ 広報東広島
ひがしひろしま
2022年9月号

農業を未来につなぐ。

全国的に農業従事者の高齢化、担い手不足が問題となる中、東広島では奮闘する若い世代も。就農のきっかけや農業にかける思い、今後の展望などについて若手就農者に話を聞きました。

問 農林水産課　☎(082)420-0939

今回の広報紙特集に関するアンケートにご協力ください。

CONTENTS

2　特集　農業を未来につなぐ

8　TOPICS
認知症高齢者等見守り支援事業について／災害時の応急給水について／9月10日は下水道の日　など

12　子育て応援隊
子育てサポーター養成講座／ナースカフェ　など

15　HIGASHIHIROSHIMA event
ノウフクマルシェ／三永見学会～東広島天文台見学と疑似宇宙旅行～／アクアフェスタ in 福富／親子で福祉のお仕事体験バスツアー in 豊栄町／東広島熟年マイスター教育講座／美術館特別展「難波平人－世界集落、その魂を描く」など

23　東広島生活情報局
ごみ減量化標語コンテスト／農業用ため池管理者向け研修会／新型コロナワクチンの接種／SDGs週間／東広島市新ビジネスモデル応援プロジェクト補助金／がん予防講演会／後期高齢者医療制度窓口負担割合の見直し／9月20日㈫～26日㈪は動物愛護週間　など

32　相談室

34　夜間休日救急当番医

36　マイナンバーカードの申請が簡単に！～第2弾の申請期限迫る～

日…日時・期間　場…場所　内…内容
対…対象者　定…定員　相…相談員
料…料金・費用　持…持参物
締…締め切り　申…申込方法・申込先
問…問い合わせ先　☎…電話番号
FAX…FAX番号　✉…Eメール
URL…インターネットアドレス
※料金の記載のないものは無料
※申込方法の記載のないものは申込不要
※本紙に掲載した記事の最新情報は市ホームページをご覧ください。

安芸の山里農園 はなあふ
森 昭暢（あきのぶ）さん

1 種は、しっかりと根を張る在来種、固定種を使用。
2 研修生受け入れの他、移住や就農の相談にも積極的。
3 武田中学校の生徒がバイオディーゼル燃料作りを体験。

植物共生微生物が豊富な土壌で育つ野菜本来の味をお届け

森昭暢さんは、大学や大学院で土壌微生物について研究し、会社員を経て、平成23年に就農しました。「土壌微生物の力を生かした農業がしたいと思ったことが就農のきっかけ」と語る森さん。県内外の80以上の農家を訪問し、風通しや土壌、水、生態系などに最も魅力を感じた志和町へ移住を決めました。現在は、約2.7ヘクタールの農地で、年間約40種の野菜を栽培しています。

森さんが実践するのは、農薬や化学肥料を使わない野菜作り。土の中に住み着く植物共生微生物が、肥料や水以上の役割を果たしてくれるため、肥料も水もほとんど与えていないそうです。「健康な作物や土壌、土壌微生物は、人の健康につながっている」と考え、年に2回以上の土壌調査に加え、土壌微生物の多様性調査も実施しています。

持続可能な循環型農業にも取り組む森さん。トラクターには、地域の飲食店などから回収した廃食油をろ過した、バイオディーゼル燃料を使用。米ぬかや油かすなどの食品副産物を肥料にしています。種や育苗方法、草刈りの長さにまでこだわり、味の濃いおいしい野菜を作り続けています。

「農業はネットワークが大切」と話す森さんは、地元のマルシェに積極的に参加。世界から訪れる研究者や大学の先生、学生にも惜しげもなく情報を提供しています。野菜作りだけでなく、講演や「広島土壌医の会」の会長を務めるなど、幅広く活動する森さんから農業を学びたい研修生は後を絶たず、3年先まで受け入れが決まっているのだとか。

「これらは全て未来の農業界への投資ですよ」と笑う森さんの挑戦は、まだまだ続きます。

◆安芸の山里農園 はなあふ（志和町）
農園名の「はなあふ」は「春」「夏」「秋」「冬」から一文字とって命名。土壌医資格を持ち、東広島マイスター「ひとマイスター」でもある。

あらちゃんファーム
荒谷 浩一さん

1

2

3

1 肥料は手作り。人にも畑にも良いものを使用するのがモットー。
2 赤いラベルを目印に。
3 一般的に栽培されているナス「筑陽」も、ここで育つと果実のようにおいしく生食できる。

自然由来の菌を生かした土づくり「食卓が幸せになる野菜」を育てたい

農業高校から山口大学農学部へ進学した荒谷浩一さん。大学時代は、有機農家「なかむら自然農園」（山口県山口市）でアルバイトをしていました。卒業後は育苗の仕事に就きましたが、次第に「苗のその先の成長が見たい」と思うようになったそう。そのとき思い出したのは、なかむら自然農園のおいしい野菜の味でした。そこで、研修生として、なかむら自然農園で2年間研修。その後、令和2年に就農。今年から兄の利一さんも加わり、約1.2ヘクタールの農地で、年間約60種の野菜を作っています。「食べたくなるおいしい野菜」「家族や大切な人に食べてもらいたくなる安心安全な野菜」を提供しようと、最もこだわっているのは土。土壌微生物は病害を軽減したり、有機物を分解したりと、大切な役割を担います。そこで、土壌微生物の動きをよくする乳酸菌や納豆菌、酵母菌など、自然由来の菌を畑に投入。堆肥には、豊栄町でビール麦を食べて育つ肉牛の牛ふんを用いています。化学肥料や化学農薬、除草剤は不使用。肥料過多による野菜のえぐみを防ぐため、毎年土壌分析も欠かしません。

「子どもの頃、祖母が育てた新鮮な野菜で作った料理を家族で取り合っていました。今でも幸せな思い出です」と語る荒谷さん。大切な人たちとの食事がさらに幸せな時間となるよう、「食卓が幸せになる野菜」を目指しています。より親しんでもらえるよう、屋号に自身のニックネームを付け、ラベルや看板は似顔絵のイラスト入り。子どもたちが「あらちゃん！」と呼んでくれたり、「あらちゃんファームの野菜は子どもがよく食べる」と言ってもらったりするのが、荒谷さんにとって何よりの励みになっています。

◆**あらちゃんファーム**（西条町）
店頭販売、イベント出店の他、「野菜セット」や「野菜の定期便」の発送もあり。

アグライズ
農場チーフ
堀 泰之さん

1

2

3

1 季節によって違う味わいが楽しめるのが特徴。冬は驚くほど甘く、夏はさっぱり。
2 かん水量や施肥量を一括管理する制御盤が活躍。
3 トマトは少し赤く色づいたタイミングで収穫される。

農業をもうかる産業に法人だからできる、効率のよい栽培方法

「食と農業は文明の根幹」と語るのは、入社4年目の堀泰之さん。かつては、ホテルマンや塾講師など、人と関わる仕事に従事していました。「生きていく上で、食事は必要不可欠なもの。それなのに、古くからある農業は、産業として立ち遅れていると感じていたんです」と、当時の農業への思いを話します。農業に可能性を見出した堀さんは、時代に即した農業はもうかると考え、異業種から農業に転職を決めました。

農家から多くの求人がある中、社会保険が完備され、経験豊富なスタッフのサポートを受けることができると考え、アグライズに入社。現在は、農場チーフとして、25人のスタッフと一緒に働いています。

「巨額の投資による設備の導入やトマトの計画的な栽培は、法人経営だからできること」と話す堀さん。3棟のハウスでは、年間約150トンもの「トマト撫子」を栽培。液肥と水は地に挿した管を通じて地中へ投入し、かん水量や施肥量はコンピュータで一括管理するなど、本来なら手のかかる作業を効率化しています。

堀さんは「もうかる農業スタイルの確立は、次世代に農業をつなぐ上で重要」と、未来を見据えています。「設備や人手により、高品質なトマトを安定的に栽培できるのがうちの強み。今後は、どう付加価値をつけるかが課題」と現状を冷静に分析。「東広島のトマトといえばアグライズ」と思ってもらうことを目指して、マルシェへの出店やSNSでの情報発信、目を引くパッケージデザインなどにも注力しています。豊富な人材から生まれるアイデアも、アグライズの強みです。

◆**アグライズ**（西条町）
トマト撫子（品種は、りんか409）をほぼ通年で栽培、販売する。ネット販売、ふるさと納税でも人気。

やまもと有機菜園
山本 朋和さん㊨
智美さん

「おいしい野菜」のための有機栽培 夫婦で築く「食と農」の安心

1 香りが良く、つやつやの葉を広げるバジル。
2 8月末はキュウリ、カボチャ、ズッキーニ、バジルなどが収穫される。
3 有機野菜で作るドレッシング、ジャム、ジェノベーゼ。季節限定なのでお早めに。

山本朋和さんは、会社員から一念発起。有機農業法人での約1年間の研修を経て、平成28年に就農しました。現在、約80アールの農地で、年間約60種の野菜を栽培・出荷しています。

「天然資材をうまく使うことで、多様な生物が住み着き、バランスの良い環境となるように意識しています」と語る朋和さん。広々とした畑には、豚ぷんやカキ殻など、できるだけ近隣で手に入るものを使って土づくり。刈り取った雑草も畝の間に敷いて、土に戻します。多品種の栽培には苦労があるものの、良い状態を保った土壌と多様な野菜を育てることで、リスク軽減につなげているそうです。「有機JAS認証を取得していますが、原点は『おいしい野菜を食べたい』とシンプル。そのために、土壌や微生物、草の力を借りています」と話す朋和さんの農業スタイルは、どこまでも自然体です。

やまもと有機菜園では、収穫した野菜を使った加工品の製造にも取り組んでおり、料理教室を主宰していた妻の智美さんが開発・製造を担当。ドレッシングやジャムが好評です。

夫婦で役割分担し、二人三脚で作る野菜や加工品には、農業に対する真剣な思いが込められています。

有機JAS認証支援事業補助金

農林水産物の付加価値を高めることを目的に、有機JAS制度に基づき有機JASマークを使用しようとする市内の農家を支援しています。

問 農林水産課　☎(082)420-0939

◆やまもと有機菜園（高屋町）
店頭販売、イベント出店の他、季節の野菜6~7種が入った「野菜セット」、さらに旬の加工品も付く「野菜と加工品のセット」の発送もしている。

ひがしひろしま 農業GUIDE

園芸センターでは、就農と定住を考えている人に向けて、まちの魅力や就農支援の制度などを紹介した「ひがしひろしま 農業GUIDE」を配布しています。先輩就農者や園芸センターの卒業生とともに、農業の未来を築きませんか。

問 園芸センター　☎(082)433-4411

採れたてのおいしさを食卓に

東広島市内の生産者が育てた野菜が購入できる店舗はこちら。

- ◆道の駅西条のん太の酒蔵
- ◆道の駅湖畔の里福富
- ◆とれたて元気市となりの農家店
- ◆となりの農家高屋店・黒瀬店
- ◆スーパーマーケットの地元野菜コーナー　など

東広島市園芸センター

農業で一人立ちするには、さまざまな技術を習得し、知識と経験を積むことが大切。園芸センターは、野菜や花きの栽培に必要な実践的知識と基本技術のほか、経営管理についても学ぶことができる就農支援機関です。農業研修では栽培の基礎を学び、センター内のほ場や先輩農家の農場で実習。営農計画の作成もサポート。その他の講座に加えて土壌分析や農業相談も受け付けています。

主な研修・講習

1 **農業研修**　専業農家を目指す人を対象に、2年間の実践研修
2 **生産講座**　園芸作物栽培で所得向上を目指す人を対象に、毎月1回程度の講義（野菜コース、花きコース、果樹コース）
3 **園芸日曜講座**　農業未経験者を対象に、毎月1回程度、日曜日に講義

園芸センターで農業研修を受けた
加藤 貴昭さん

地域の高齢化などで、農業の存続に不安を感じていた加藤さん。これからの農業は若い力が必要だと感じ、令和元年から2年間、園芸センターの研修生として、農業に関する知識と技術を学びました。令和3年に就農し、ハウス栽培と露地栽培で年間約50種の野菜を栽培。ヨーロッパ野菜や高機能野菜、ケールといった珍しい野菜が消費者に人気です。「栽培実習では、単品種ではなく、野菜や果樹などさまざまな農作物を育て、出荷までを経験することができました。これらの経験が、多品種栽培に大いに役立っています。現在も園芸センターに土壌分析をお願いしたり、指導員にアドバイスをもらったりと並走して支えてもらい、心強い存在です」と加藤さん。園芸センターをきっかけに、販路開拓につながったこともあるそうで、「就農を考えるなら、利用しない手はありません」と話してくれました。

◆自然農園 ALL GREEN（高屋町）

たい肥の投入を助成します

米や園芸作物の生産を行うための、たい肥購入に要する経費を助成します。

対 投入面積／概ね10アール以上
補助率／1トン当たり千円
※この他、アスパラガスと白ネギを栽培する担い手に対する加算があります。

申 たい肥投入前に申込書（市のホームページからもダウンロード可）に必要事項を記入の上、提出

問 農林水産課　☎(082)420-0939

第2回 ぶちうまいお米コンテスト in 東広島

「米どころ東広島」の生産者たちが丹精込めて育てた「ぶちうまい！」お米のコンテストです。あなたが作った自慢の米で挑戦してみませんか。決勝大会は、一般の人も観覧できます。ぜひお越しください。

締 出品申込／9月30日㈮まで
※申込書は市ホームページからダウンロード可。

日 出品期間／10月3日㈪～28日㈮
決勝大会／11月17日㈭　13：00～

場 道の駅湖畔の里福富 多目的ホール

問 農林水産課　☎(082)420-0939

出品者募集中!